令和６年度　各務原市立桜丘中学校　学校経営の全体構想

＜目指す生徒像＞

新しい時代に対応し、よりよく生きるための基礎力を身に付けた生徒

○目標達成に向け計画性をもって粘り強く取り組む力
○相互理解に努め、対人関係を調整し、集団の中で自分のよさを発揮する力
○新しい知識や技能、見方・考え方を積極的に身に付け、それを活用しようとする力
○獲得した知識や情報を活用し、考えたり表現したりして、仲間と共に課題を解決する力

＜各務原市の教育＞ 誇り･やさしさ･活力のある生徒
～一人一人が学ぶ喜びを実感～
・たくましく生き抜く力の育成　・安心して学べる教育環境の提供

＜学校の教育目標＞　**志をもって生きる**

常に自分を高める　『向上』
ルールやマナーを守る　『礼節』
感謝と思いやりの心をもつ『思いやり』

＜学校課題＞

○一人一人の実態に応じた指導で主体的に学ぶ態度を育成するとともに、基礎的な学力を身に付けさせる
○多様な考えや生き方を認め合い、互いを尊重し、思いやりの心を高める
○地域や保護者との連携を深めるとともに、自治的な活動を通して元気で活気のある学校をつくる

＜目指す教師像＞

組織力・機動力・自己啓発

○よく工夫し、わかりやすい授業をする教師
○意識を高くもち、指導力向上に努める教師
○家庭、地域との連携を大切にする教師
○職員集団の和を大切にする教師
○心と体にゆとりをもって子どもに向かう教師

＜自主性・自律性・協同性を育む教育活動の創造＞

１．仲間とともに学び合う授業づくり

①「やったー、できた、分かった」のある授業
・想いを込めた単元ビジョン
・生徒が生き生きと学べる、学び合う指導プラン
・生徒が選択＆調整できる授業展開
②よりよいinputのために最適化された豊かなoutput活動のある授業デザインの創造
・ICT活用によるinputの効率化とoutputの多様化、個性化
・outputに比重を置いた一単位時間の構成

２．当事者意識をもち、自己有用感が高まる学級・学校づくり

①「貢献」と「承認」を実感できる日常活動の充実
・相互評価によるよさの価値付け
・ボランティア活動の推進
②「達成感」と「存在感」を味わえる活動の工夫
・企画を楽しむキャンペーン活動の充実
・組織を活かした活動づくり

３．健康で安心・安全な生活づくり

①一人一人に居場所がある学級経営
・いじめ未然防止と教育相談の充実
・関係機関との連携によるケース会議の充実
②命を自分で守り切ることができる力の育成
・危険予知能力、危機回避能力の育成

＜地域と共にある学校づくり＞

１．「さくら学園」のシンカ・カイゼン

①校区小学校との連携強化
・生活習慣、学習習慣の基盤づくり
・オンラインを活用した交流活動
②地域組織との連携強化
・「あいさつ」を核としたかかわりづくり
・防犯、防災体制の構築

２．地域、保護者の活力の導入と学びの発信

①学校支援ボランティアの拡充
・地域人の特技や専門性を発揮する場の提供
・安心して学べる環境整備支援
②学びの成果を地域へ発信する活動の推進
・生徒による社会貢献活動（地域ボランティア活動）の場の設定

３．学校評価の質の向上

・学校と地域が連携した、PDCAサイクルの確立

＜対応力の高い自律型組織運営の実現＞

１．職員個々の対応力向上

①職員個々のスキルアップ
・教育公務員としての専門性の錬磨
・ICTを活用した新しい教育技術の習得活用
・根拠に基づいた共通行動の徹底
　ねらいや願いの共有
　法令の遵守
②情報の共有と活用
・事後検証の重視
　成功、失敗事例の経過の可視化と共有
・生徒や外部からの視点による想定を重視

２．自律型組織運営の実現

①主体的に考える職員
・危機感の共有（リスク、コスト）
・豊富な経験と得意を活かせる校務分掌
・精度の向上に比重をかけた企画、運営
②迅速に動ける仕組み
・サーバントリーダーシップの浸透
・よいと思ったことは「まずやってみる」
・一何の原則の徹底
　変化や違和感、危険信号を即時、随時に
③改善のための対話と協働
・業務の新しい標準化のための創意工夫
　子どものため　地域のため　職員のため
・職員間のよさみつけ

桜丘中学校　令和６年度に向けて

2024/3/18　小嶋

１ 学校の教育目標

志をもって生きる

向上	礼節	思いやり
常に自分を高める	ルールやマナーを守る	感謝と思いやりの心をもつ

【合い言葉】桜中ＡＢＣＤ（あたりまえのことを ばかにしないで ちゃんとする人こそ できる人）

「志をもって生きる」→ 公の中の自分としてのウェルビーイング(幸せ)を追究することであり、日々の営みにおいて，そのための選択を重ね続けること と捉える。

私たちが，ウェルビーイング(幸せ)と感じられる状態とは，以下の要件が整っているとき。

自己受容：自分を受け入れる。長所も短所も含めて自分にＯＫを出せる。
他者信頼：まわりの人を信頼できる。
貢 献 感：まわりの人の役に立てている。

そして，ウェルビーイング(幸せ)であり続けるために必要な力は，以下の2つ。

自　　立：自分でできる。自分はこうしたいと思える。
協　　力：まわりに助けを求めたり、考えや意見の違う人と折り合いをつけられる。

その力を培うために，日々の営みにおいて常に求めたい行動目標が以下の４つ。

やってみよう（自己実現と成長）：夢や目標をもち、主体的に行動する。
ありがとう（つながりと感謝）：人と積極的に接して、感謝できる。
なんとかなる（前向きと楽観）：常に前向きで楽観的、気持ちの切り替えが速い。
ありのままに（独立と自分らしさ）：人の目を気にせず、本来の自分のままに行動する。

「志をもって生きる」ための原点は，「あたりまえ」のことを「そこまでやるか」といわれる程にとことん打ち込むこと。「桜中ＡＢＣＤ」。真理は平凡の中にある。

２ 自己有用感の涵養

志をもって生きている生徒たちであるかどうかを評価する窓の一つが「自己有用感」の高まりである。「自己有用感」は，他者や集団との関係の中で自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚であり，相手の存在なしには生まれない。

「自己有用感」は，良好な人間関係のもとで他者や集団に「貢献」し「承認」されることで、他者や集団における「存在感」が高まる。本人が実感している「存在感」が他者や集団に「貢献」したいという意欲につながり、「貢献」できたことで満足感を得たり、「承認」されたりする。「自己有用感」は、それを構成する主な要素の「存在感」「承認」「貢献」が相互に関連し合って高まっていく。

【承　認】・自分の考えが相手に伝わり、仲間と自分の考えが共有できたり、諸々の活動や話し合いの中で活躍できたという満足感
【貢　献】・自分から動いて、仲間の役に立てたという充実感
【存在感】・仲間に働きかけ、集団の一員としてなくてはならないという自己存在感
・目標をもち、結果を出そうと努力する過程をこそ認めてもらえる安心感

学校生活の様々な活動場面で「貢献」と「承認」を感じられる場を位置づけ、機を逸しない評価によって「できている自分」を自覚させることを意図的、計画的、継続的に、全職員が意識して実践することを求めたい。その状況を,「自己有用感尺度」によって測定する。

「自己有用感」の高まりは、いじめの未然防止につながる。人とかかわることを喜びと感じる体験を通して、面倒だったり、いやなこともあったりするけれど、他の人とかかわることは楽しいし、役に立てたらうれしいと感じる場や機会をつくることで、いじめの加害者になることを防ぐ。

要素	評価の窓 ○○：クラスの人・先生・家の人
存在感	○○の役に立っている ○○から頼りにされている ○○の重要な一員だ ○○から信頼されている
承認	○○からほめられる ○○からありがとうと言われる
貢献	○○の手伝いをする ○○が納得するような意見を言う
関係性	○○と一緒にいると安心 ○○を信頼している ○○に支えられている

3 よりよいinputのために最適化された、豊かなoutput活動のある授業デザインの創造

一人一台端末、大型モニター、クラウドは、私たちに「教授の効率化」と「情報共有の簡便化」という恩恵をもたらしてくれた。もはやそれがあたりまえになっている私たちが次に為すべきことは、その恩恵を最大限に生かして、生徒が学校にいる時間内に、一人一人に学ぶ力、生き抜く力を確実に身に付けさせるための方法を考え実践し、新たな授業デザインとしてまとめ上げていくことである。その際、次の2点に留意したい。

① input30：output70　目的はinput内容の定着であり、output活動はあくまでも手段

outputしなければならない状況に立たされているとき、人はinputに対して貪欲になる。ICT活用による教授の効率化によって生み出された時間を使って、必然性があり豊かで魅力的なoutput活動を仕組み、そこに向かう意欲を高めながら習得と活用を繰り返して、input内容の確かな定着へとつなげる。

② 自己選択と自己調整

内発的な動機付けはポジティブな行動を促し、ウェルビーイングを向上させる。学習においても、その内容に対して内発的に動機付けられていることが望ましいが、そうでない場合には、内発的動機付けを支援するような外発的動機付けを巧みに組み込む必要がある。その鍵となるのは「自己決定」であり、「選択」や「調整」を個の特性に合わせて生徒にゆだねることである。私たちは、生徒の自律性を失わせないよう「そっと後押しする」ことが指導者としての役割であるということを自覚し、基本的な構えとしてもっていなければならない。

4 目指す教師像

■個々の力量を最大化する「組織力」 ■情報を共有し、機を逃さず主体的に対応する「機動力」 ■プロフェッショナル人材としての「自己啓発」	○よく工夫し、分かりやすい授業をする教師 ○意識を高くもち、指導力向上に努める教師 ○家庭、地域との連携を大切にする教師 ○職員集団の和を大切にする教師 ○心と体にゆとりをもって子どもに向かう教師

５ 対応力の高い自律型組織運営の実現

（１）職員個々の対応力向上

①職員個々のスキルアップ

・ICTを活用した新しい教育技術の習得、活用

・根拠に基づいた共通行動の徹底（ねらいや願いの共有、法令の遵守）

②情報の共有と活用

・事後検証の重視（成功、失敗事例の経過の可視化と共有）

・生徒や外部からの視点による想定の重視

（２）自律型組織運営の実現

①主体的に考える職員

・危機感の共有（リスク、コスト）

・豊富な経験と得意を活かせる校務分掌

・精度の向上に比重をかけた企画と運営

②迅速に動ける仕組み

・サーバントリーダーシップの浸透

・よいと思ったことは「まずやってみる」

・一何の原則の徹底（変化や違和感、危険信号の報告、連絡、相談を即時、随時に）

③改善のための対話と協働

・生徒、地域、職員にとって、よりよい業務標準化のための創意工夫

・職員間のよさみつけ

６ 人権感覚を努めて磨く

子どもたちの前に立つ私たち桜丘中学校教職員が最も大切にすべきは、『人権感覚を研ぎ澄ます』ことです。「子どもの権利条約」は、子どもを権利をもつ主体と位置づけ、大人と同じく、ひとりの人間としてもっている権利を認めています。また、令和５年４月１日から施行された「子ども基本法」には、基本理念の第一に「全てのこどもについて、個人として尊重され、その基本的人権が保障されるとともに、差別的取扱いを受けることがないようにすること。」が示されています。「教師 対 生徒」の前に、「人間 対 人間」として目の前の生徒との関係性をとらえ、発する言葉を選択しなければなりません。上から目線の物言いや、一方的な価値観の押しつけは、私たちから最も遠ざけなければならない振る舞いです。

私たちが子どもを一人の人間として尊重し,対等な存在として認識しているかどうかの自己評価は,「子どもの話を傾聴できているかどうか。」であると思います。子どもが語る言葉を遮らず，思いを語り終えるまで口を挟まない自分であるか。語り終わった子どもに発する自分の言葉が共感的であるか。思い込みはないか。偏見はないか。を常に自身に問い返すことを肝に銘じなければなりません。